

PUMPKIN (模擬原爆) の投下を 当時の日本の報道機関はどう報じたか：第一編

菊池良輝

緒言

米軍は第二次大戦中、日本への原爆投下に際し、第20航空軍 Twentieth Air Force 傘下の第313爆撃航空団 313 Bombardment Wing (テナアン島北飛行場 N. Airfield Tinian I.) 隷下にはほぼ独立した第509混成群団 509 Composite Group と呼ばれる特殊部隊を編成し、原爆投下作戦任務に従事させた⁽¹⁾。

なお、当任務にかかわる米軍の基本資料とも言うべき以下の4書は次のように表記したい。

- ・ Twentieth Air Force “A Statistical Summary of Its Operations Against Japan” Mission and Accomplishments. : 『TAF 書』とする。
- ・ 上記 TAF 書「Supplementary Table Twentieth Air Force Special Bombing Missions 509th Composite Group」: 「509th CG 表」とする。
- ・ 上記 TAF 書「20 AF Special Bombing Missions」: 「20AFSBM 図」とする。
- ・ The United States Strategic Bombing Survey “The Effects of the Ten Thousand-Pound Bomb on Japanese Targets” A Report on nine Incidents. May 1947: 『USSBS 報告書』とする。

米軍は原爆投下訓練用に長崎原爆と同型の爆弾を製造し日本各地に投下訓練した。その爆弾は重量1万ポンド(4.5トン)、爆弾重量比51%、AN-MK219と呼ばれた高性能接触信管 AN-MK219 instantaneous nose fuz(s)es 3個を装着した大型爆弾であり、1万ポンド軽

筒爆弾 “10,000-pound LC special bomb” “Light-case, 10,000-pound weapons” と呼ばれた⁽²⁾。

また、その弾体は橙黄色に塗装されていたことから PUMPKIN (かぼちゃ) とも通称された⁽³⁾。日本では一般に模擬原爆と称している。

以下に、投下された日本側の記録を当時の主要メディアである新聞を中心に記したい。「年」は特に注記がない以外、昭和20(1945)年である。なお、引用文中、○は判読不明文字・数字を表す。

【7月20日】

模擬原爆の投下は7月20日(金)を嚆矢とする。「単機或は小数機で飛来し、一発の大型爆弾」を投下して去って行くB-29に報道機関はある種の疑懼を抱いた。以下、翌21日(土)の新聞を、やや長文ながら掲載する。

Target name⁽⁴⁾. : Otsu (茨城縣多賀郡大津町)

『朝日新聞東京本社(7/21)』に、見出し(1段)で「帝都へ投弾」とあり、本文に「B29一機は二十日午前六時頃下田附近より侵入、大月を経て……別のB29一機は午前七時頃鹿島灘より水戸……さらに他のB29一機は同七時五分頃茨城縣日立附近に侵入下館、浦和を経て帝都に侵入、一部に投弾したる後房総半島を経て同八時二十五分頃勝浦附近より脱去した」とある。

ここでは4機のB-29を追っているが、最初の1機は午前6時頃下田付近から侵入-大月-前橋-新潟を経、7時40分頃山形地区から脱去した、別の1機は午前7時頃鹿島灘より水戸付

近に侵入－栃木北部－新潟－福島を経、8時40分頃平付近から脱去、また別の1機は富山地区より長野北部に侵入－同県南部を経て駿河湾から脱去、他の1機は7時5分頃日立付近に侵入－下館－浦和を経て東京に投弾－8時25分頃勝浦（房総半島：菊池注）から脱去したとある⁽⁵⁾。『朝日新聞』の記事による限りB-29が天津に投弾したとの記述はない。

ところが同日の『毎日新聞 [東京]』に、「見出し（3段）主：B29約百五十機來襲 袖：銚子、鹿島灘沿岸を焼爆」とし、本文記事に「十九日深夜茨城県下に來襲したB29の編隊は豊浦町、天津町に對しても焼夷弾攻撃を加へた」とある⁽⁶⁾。

「509th CG表」に7月20日、高度28,000フィートからOTSUに1個投弾したとある。「20AF SBM 図」では鹿島灘にHITACHIと共にOTSUとあり（やや北方にTAIRA）、ここに言うOTSUは茨城県多賀郡天津町である。

『茨城県の百年』『茨城県史』『北茨城市史』等は空襲等詳記しているが、7月20日に天津町が爆撃されたとの記述はない⁽⁷⁾。

「春日井の戦争を記録する会」は着弾地点を不明とし、1992年に当地を訪問し調査したが結局不明であった、としている⁽⁸⁾。

唯、天津町は4月12日に爆撃され死傷者を出している。そのことも含めて『茨城県史』『模擬原爆と春日井』は天津町が風船爆弾の発射基地であったことに注目している⁽⁹⁾。

現時点では天津町への着弾点は確認されていない。しかし「509th CG表」等の米軍資料による限り天津町が爆撃されたことは事実のようであり、その時間は、午前7時55分頃と推定される⁽¹⁰⁾。一方、米軍は日本180の市街地をリストアップし、適時爆撃しているが、「町」である天津町は対象となっていない⁽¹¹⁾。

『毎日新聞』の「天津町に對しても焼夷弾攻撃」との記事が実見してのものかどうか不明だが、米軍が模擬原爆を投下したのは事実と思われるので、同紙の記者が焼夷弾と誤認したことは十分考えられる。

茨城県多賀郡天津町は現・北茨城市天津町。

Target name : Tokyo（東京都）

Otsu 条に記した『朝日新聞東京本社（7/21）』の「他のB29一機は同七時五分頃茨城県日立附近に侵入下館、浦和を経て帝都に侵入、一部に投弾したる後」が該当する。

21日の『毎日新聞 [東京]（7/21）』が「一機の投弾」と題する囲み記事を組み、「見出し（3段）主：帝都殘存建物へ精密爆弾の“警告” 袖：大型爆弾に備へ完全分散」として以下のよう記している。

「明らかに朝の出勤時間を狙ってB29一機が廿日朝八時廿五分頃、都心某駅（東京駅：菊池注）西方の河中へ爆弾一個を投下して南方へ脱去した、現場から推定するにこの爆弾は決して小さいものではない、現場は湿地帯であったので被害は極めて僅少でいふに足りぬものであった、しかし焼け跡が多く遮蔽物が無いので爆風は相當遠い距離にも達しガラスの毀れたのは三、四百メートル先にもあったが千メートルぐらゐの店でも震動を感じ二千メートルぐらゐのところでも爆風を感じた

爆弾をもって単機で帝都へ侵入、しかも都心を狙って行ったことは珍しく、今回のやり口から見て敵は今旺んに中小都市焼爆に主力を注いでゐるが、今後を警戒せねばならない、殊に中小都市爆撃も全国の市を全部虱つぶしにやるといふのでなく、ある程度やったら農村爆撃に移行する前に帝都はじめ大都市殘存建物への精密爆撃へ還元することは明らかだが、これに對して最近都民の防空への関心は不感症的傾向が見られ、むしろ不意に一發ドカンと落とされた爆弾は敵の與えた警告である、來るべき帝都の空襲再会への備へを防空部本部に聞いてみる

最近の帝都の防空を見ると警報が頻繁に出るので不感症になってゐる傾向があるのと空襲への諦観から防げる災害も防がうとする努力が見られない、空襲警報の最中に百貨店が

営業してゐたり映画館は一應観客を場外へ出したものの空襲警報が解除にならぬ前から再開するのを待つて場外に多数の観客が詰めかけ蝟集してゐる、廿日朝のやうに出勤時を狙つての投弾はかゝる緩んだ防空態勢への警告である、夜中の空襲警報に對した中小都市だらうといふので地方の中小都市は緊張して頑張つてゐるのに東京都民は寝てゐるといふのではお話にならない、敵もある程度中小都市をやったら農村爆撃などに移行する前に再び帝都の残存施設を狙つて精密爆撃に來ることは十分豫想される、今のやうに残存建物へわれも〜と割り込まうとしてゐるのではむしろ逆行してゐるので今のうちに徹底的に分散をして事前の準備を完了すると共に、いざ精密爆撃で來るとなったら敵は從來の如く二百五十キロ、ばかりでなく最近五百キロ、1トンといふやうな大型爆弾も持って來てゐるので鉄筋建物にへばりつかず最小限度の要員を残して分散待避をすることである⁽¹²⁾

1944（昭和19）年6月15・16日の八幡製鉄所への爆撃から始まった米軍の日本への戦略爆撃はこの頃苛烈を極めており、そこに一種の慣れが見られることへの警告をしている。

また先記『朝日新聞東京本社』も2面で主：（3段）B29たった一機が爆弾投下 袖：帝都へ昨朝“油断大敵”の戦訓」として大意以下のように述べている。

「20日午前8時半ごろ突如B29が低空で侵入、爆弾1個を投弾した。最近中小都市攻撃と連携する警報発令により緊張を欠いていた都民の心を引き締めた。爆弾は1発であったが被害が広範囲に渡っている」としている。新聞には場所を記していないが、中央区・八重洲口に投弾された模擬原爆である。そして、「飛行機を見たら日本機か敵機か見極め瞬時に行動せよ」とも記している。また、「最近警報伝達のサイレン吹鳴がまちまちで戸惑うことが多い」として、当局の回答を求めている。当局は、機材故障・空襲による機材の破壊等による一斉吹鳴の不可、情報伝達の混乱、ラジオ放送からの推測吹鳴、

を挙げている⁽¹³⁾。

ここでも『毎日新聞 [東京]』同様、爆撃への慣れを警告している。

『讀賣報知』は1面で前記『朝日新聞』の1面とほぼ同様な記事を掲載しているが2面で以下のように述べている。

「見出し（3段）主：油断が怪我の因 袖：“一機だから”とて大型爆弾を投下・爆風には低い姿勢を」

「連日來襲する敵機は……廿日午前八時廿分頃帝都上空を通過したB29一機は偵察と見せて京橋区内に突如大型爆弾を投下した、幸ひに爆弾は堀に落下し被害は皆無に近かったが落下地点近くでは爆風で窓ガラスが破れたところがある、いままでの二百五十キロ級の爆弾と異り〇〇〇防空技師の話によると

「水中に落下したから確定的な判断は下せないが從來敵の使用してゐた五百キロより破壊力が強く、一トン爆弾としては少し破壊力が弱いやうに思はれる、特に從來と違ふのは破片が薄いことでこんな破片は初めてである、これは敵が建物破壊のためでなく人畜殺傷を目的にしたものとみられ爆薬が多量に入つてゐるやうに推定される⁽¹⁴⁾」

各紙ともかなりの大型爆弾と推定しているが、『讀賣報知』が防空技師の「特に從來と違ふのは破片が薄いことでこんな破片は初めてである、これは敵が建物破壊のためでなく人畜殺傷を目的にしたものとみられ爆薬が多量に入つてゐるやうに推定される」との言を紹介している。

米軍が“Light-case, 10,000-pound weapons（1万ポンド軽筒爆弾）”と名付けた特徴を捉えており、当を得た取材である⁽¹⁵⁾。

なお、爆弾重量を『東京新聞』は250キロ爆弾とし⁽¹⁶⁾、『朝日新聞』は500キロ級以上⁽¹⁷⁾としている。『讀賣報知』が取材した技師の言として1トンに近いと表現しているのは、当時の爆弾重量感の上限を示したものであろう。

以後、模擬原爆を「1トン爆弾」と称する記述は多い⁽¹⁸⁾。

模擬原爆の投下はこの日を嚆矢とするが、

『毎日新聞』『讀賣報知』の記事に見るように通常の爆撃とは異なるものを感じたようである。『朝日新聞』は以下はかなり長文の記事を掲載し注意を喚起している。

「主（3段）：何よりも遠隔待避 袖：かうして防げ大型爆弾」

「二十日朝、偵察と見せかけて帝都に侵入した B29一機が、突如都心の一角に爆弾を投下したことは油断大敵の戦訓だった、たまたま○跡の水中に落下したため、弾種について確定的判断を下すことはむづかしいが、その後調査の結果その破壊力や爆風による被害の範囲などから推して少なくとも五百キロ級以上の相当高性能のものであるらしいことがわかった。……ここに警視廳當局に訊く大型爆弾の戦訓

大型爆弾の努力判定：二十日京橋区内に落下した爆弾は水中に落下したにもかかわらず、その弾片は周囲数百メートルに飛散し、二百メートル先の建物のガラスを破って負傷者を出したばかりでなく、その爆風は五百メートル離れた建物の窓ガラスまで破り、鉄扉をへし曲げてゐる、これは反射角度の複雑なビル街の現象として一種特殊のものであり、爆弾および土質の種類によって異なるのはもちろんであるが、今一トン級爆弾の効力を概略すれば次の通りである（以下、弾片による危険界〈立姿〉・爆風による危険界・地中侵徹爆破の状況・防空壕等につき解説）。

事前の防空態勢：大型爆弾の効力が以上のやうなところから、これに対しては遠隔待避以外にないとして、いたずらに退嬰的態度をとることは防空作戦として敗北を意味するので警視廳では次のやうな指導方針をとってゐる（以下、人員の疎開・空襲判断の条件・遠隔待避と建物の防護等につき解説）

咄嗟の處置：事前の處置をとるいとまもなく爆撃を受けた場合はその場待避以外にない、そのため爆弾の落下音に注意を拂ひ、来たなと思ったらやたらに走ったり逃げたりすることなく、附近の地形地勢を利用して速

かに身を伏せることである、敵機は国民の虚を衝かうと思つてゐる、警報下は常に空に周囲に注意し、たへず附近の地形地物と爆音、落下音等に十分耳目を働かせねばならないのである⁽¹⁹⁾と記している。

少数機軽視への戒め、これまでにない大型爆弾への対処等が述べられている。それにしてもたった一機での来襲にさえ対処できない日本の防空体制に記者の思いは如何ばかりであつたらう。

投弾時間は午前8時半頃（『朝日東京本社』7/22）・8時25分頃（『毎日 [東京]』7/21）・8時20分頃（『讀賣報知』7/21）・8時過ぎ（『東京』7/21）等とあるが『東京大空襲・戦災誌』は8時22分頃としている⁽²⁰⁾。

着弾地点は京橋区内（『朝日東京本社』7/22）・都心某駅（東京駅。菊池注）西方河中（『毎日 [東京]』7/21）・京橋区内水中（『讀賣報知』7/21）・日本橋区内河川（『東京』7/21）等としている。

なお、前記『東京大空襲・戦災誌』は投下の状況につき、「八時二二分頃東京駅東側呉服橋ト八重洲橋中間ノ堀内ニ五〇〇軒級ト推定セラレル爆弾一個ヲ投下シ……死者三名 重傷二名 軽傷者一名……」と記している。

当時、皇居外堀が東京駅東側を囲むように通じており、呉服橋（日本橋川との交差点。現・呉服橋付近）と八重洲橋（現・外堀通りと八重洲通りの交差点付近）は当時の架橋名。爆弾が「堀」に落下したのは事実のようであるし、その箇所が呉服橋と八重洲橋の中間点とすると、厳密に言えば着弾点は日本橋区と麴町区の境界点となる⁽²¹⁾。

Target name : Taira（福島縣平市）

「509th C G 表」に7月20日に2回爆撃した（爆撃高度28,000フィートと同30,000フィート）として記載されている地名。「20 AF S B M 図」でも TAIRA との記載がある。

後年の記載であるが『福島民友』に「米軍の模擬原爆」と題し、「見出し（4段）：堤破れ田

んぼ全滅」とし、大意以下の記事を掲載している⁽²²⁾。

「春日井の戦争を記録する会の現地調査の結果、昭和20年7月20日に平市に落とされたと言われる2発の模擬原爆の内の1発が、いわき市平下高久地区の新堤ため池に落とされ、1人が死亡したことが確認された。もう1発についても引き続き調査していきたい。当日爆弾の落下を実見した下高久字馬場在住の本馬元太郎氏(65)の証言によると、堤が破れて下の田んぼが全滅した、とのことである」。

また、同会は『模擬原爆と春日井』の中で、「着弾地点は福島県いわき市高久(たかく)」としている⁽²³⁾。

上記の通り特定されているのは1発のみである。

Target name : Light Industry Fukushima:

(福島軽工業：福島市)

『福島民報(7/21)』が、見出し(4段)主：「福島郊外に投弾」袖：「水田に大穴・盲爆に市民は奮起」と題し、以下のように掲載している。

(リード) 縣警防課発表(正午)二十日午前八時四十分頃敵大型と判断せらる、少數機は縣内に侵入縣下を行動したる後一部農村に無差別爆撃をしたる後九時卅三分頃関東東南部洋上に脱去せり、被害極めて輕微なり

(本文) 廿日午前八時卅分頃突如福島上空に爆音を○かせた敵大型機一機は雲上に旋回し北東に機首を向けた際置き土産に五百キロ爆弾一個を福島市郊外の水田に投弾するやそのまま北東部から洋上に逃げ去った、被害は水田約三反○に大穴をあけた程度だった、敵機は「この邊が福島市だらう一發落として驚かしてやれ」と雲上から盲滅法に投弾したのが福島市の中心部から二キロ以上も離れた山間の水田に落ちたものとみられ歸り際に驚かせてやれと云ふ神經戦には福島市民や信夫○民は決して驚かぬ、初の投弾だけにやゝもすると知ったかぶりをする人間が出たり誇大に被

害や爆撃の威力をお喋りする者が出やすいが、こんな者こそ敵の神經的燒爆に乗せられたと云ふべきで、われわれはあくまでこの戦訓を満足させる道具としてはならぬ

次に主(3段)：「現場に伏せて助る」袖：「圃場護る烈々の農魂」とし、現場で農作業に従事していた農夫の言を記している。

山陰からいきなり爆音が聞こえたと思ったから大きな音がしました、今考へるとあれが落下音だったんですね、雨戸を七、八枚一ぺんに開けた様な音がしたので、いきなり土の中にもぐる様に突伏したんですが、これで助ったんです、田畑は俺達の死場所だから、あくまでも守り抜く覺悟ですが、ほんやり立ったまゝであたりすると危険だと云ふことがハッキリ○りました、畔の蔭でも何でも○陰があったら素早く待避すれば恐ろしいとは思へない、手掘りでもいい、から穴を掘ることにします

続いて、主(2段)：「火災にも注意」袖：「警報下硝子の處置を忘るな」と題し、「爆撃後小火による火災が発生している。これは熱せられた弾片が屋根等に飛び、少時の後発火するもので、特に農村には茅葺家屋が多いのでこの種の被害に遭い易い、数十分後に発火した例もあるので充分注意が必要である。また、建具を全部ガラスとしていた某家のガラスが木端微塵に吹き飛んだ。その折廊下にいた子供と室内にいた妻女が、かすり傷一つ負わなかったがこれは奇跡に近い。ガラスには紙を貼るとか取り外しておくなどの措置が必要だ」等空襲に対する心構えを説いている。

模擬原爆の投下は7月20日からであるが、1機或は少數機での來襲に全国紙・地方紙共々、相当の注目をしているのが見て取れる。

7月21日(2面)の『福島民報』は、広告を除く15%近い紙面を福島市への模擬原爆投下関連記事に割いており、その関心の高さが伺える⁽²⁴⁾。

投弾地は信夫郡渡利村沼ノ町地内。現・福島市渡利沼ノ町四反田・渡利公民館南⁽²⁵⁾。

投下時間は被害を受けた羽田徳治氏の「時計の針が八時三五分で止まっている」との証言が

ある⁽²⁶⁾。

死傷者は即死1，負傷2⁽²⁷⁾。

Target name : Atagi Mfg. Co. Tsugami

(津上安宅製作所：新潟縣長岡市)

『朝日新聞東京本社（7/21）』が「見出し（1段）：長岡附近にも投弾」とし以下のように報じている。

二十日午前八時過ぎ B29一機は群馬縣より新潟縣に侵入，長岡市附近を巡回し，同郊外の農村に爆弾一個を投下して同八時十五分頃福井縣へ脱去，ほとんど被害なし（新潟）⁽²⁸⁾。

『新潟日報』は1997年（平成9年），「投下目標ニイガタ 追跡模擬原爆」と題して長岡（7/20）・柏崎（7/26）での模擬原爆体験者の取材記事及び鹿瀬（7/26）の着弾写真を掲載している⁽²⁹⁾。

長岡のそれは体験者の体験談等を中心に記事を進めているが，体験者が B-29 投下の模擬原爆を「ドラム缶ぐらい」と称した，とある。他には「風呂桶ぐらい⁽³⁰⁾」との記述もあり，いずれもその大きさ感を彷彿とさせる。

同紙は「投下地は古志（郡：菊池注）上組村左近（現・長岡市左近），即死4名」とし，当時の津上・安宅製作所（現・ツガミ長岡工場）従業員の，「同工場は軍需産業の基礎となるゲージや工作機械を作っていた，工場では約四千五百人が昼夜交代勤務しており，もし工場を直撃していたら大惨事になるところであった」との言を紹介している。

Target name : Taira (福島縣平市)

前記平条で述べたように平での模擬原爆投下比定特定地は一箇所のみである。

Target name : Fujikoshi Steel, Higashi Iwase

(不二越製鋼，東岩瀬：富山市)

『北國毎日新聞（7/21）』に，「見出し（4段）：東岩瀬（富山）へ數個投弾」とし，以下のように記している。

(リード4段) 二十日午前七時四十分マリ

アナ基地より進發したと思はれる敵大型機二機は富山市内に侵入，東岩瀬地區に爆弾數個投下して退去した，富山市の投弾はこれが最初で人員ならびに建物に輕微なる損害をうけた，敵今回の襲來状況を見るに屢次のごとき少數機をもって偵察と見せかけ突如投弾せるもので今後とも嚴重警戒を要する

(4段リード記事のみにて本文記事はない)⁽³¹⁾。

富山市最初の爆撃が模擬原爆の投下であった。富山市はこの日3箇所が爆撃されているが，「東岩瀬地區」と具体名を挙げているのは本紙のみである。

Target name : Nichiman Aluminum Co. Toyama

(日滿アルミニウム会社，富山：富山市)

Target name : Nippon Soda Co. Toyama

(日本曹達，富山：富山市)

『ルメイ最後の空襲』が詳説すると共に，日本曹達・富山製鋼所近傍への着弾写真を掲載し，その時間を午前8時3分としている⁽³²⁾。

『日本都市戦災地図』富山市には上新川郡大廣田村中田（昭和15年富山市編入：菊池注）に爆撃マークがある。日本曹達への爆撃である。同様，奥田村（昭和10年富山市編入：菊池注）二箇所に爆撃マークがある⁽³³⁾。

『朝日新聞東京本社（7/21）』が，「見出し（1段）：B29富山市に投弾」と題し，以下のように記している。

二十日朝七時三十分頃阪神方面より東北進した B29二機は琵琶湖，福井，金澤を経て富山市内に侵入爆弾數個を投下したのち逐次東南下し八時半頃駿河灣口附近より南方に脱去した，このため同市内に火災を生じたが間もなく鎮火，被害は極めて輕微である（大阪）⁽³⁴⁾。

他には『朝日新聞大阪本社（7/21）』⁽³⁵⁾，『京都新聞(7/21)』⁽³⁶⁾，『北日本新聞(7/21)』⁽³⁷⁾がそれぞれほぼ同文を掲載している。

なお，『朝日新聞大阪本社（7/21）』が「敵機來襲圖（十九日二十時－二十日十八時）」を

掲載しているが、それによると B29 3 機（機：菊池注）が 7 時 15 分 - 7 時 28 分、紀伊半島熊野付近から侵入、大津を経て、越前岬付近の洋上で旋回、富山方向に向っている。機数・時間等から富山に模擬原爆を落とした B29 と推定される⁽³⁸⁾。

日本曹達への上空からの爆裂写真は公開されている⁽³⁹⁾。

【7月24日】

- Target name : Sumitomo Copper Refinery, Niihama
(住友銅精錬所, 新居浜 : 愛媛縣新居濱市)
- Target name : Sumitomo Aluminum Co. Niihama
(住友アルミニウム会社, 新居浜 : 愛媛縣新居濱市)

『愛媛新聞 (7/25)』に、「見出し (3 段 2 行) : 新居濱, 松山, 宇和島等の工場, 船舶狙ふ」とあり、以下の記事がある。

(リード) 二十四日午前六時すぎ B29 および P51……方面から相ついで侵入したのをはじめ前後数回にわたり大、小型機が本縣下に來襲、瀬戸内海航行中の小型船舶や松山、新居濱、西條、宇和島市附近の地上施設に對し銃爆撃を加へ來った、……今後とも小型艦上機の機銃、攻撃に對する機敏な待避と嚴重な監視を怠ってはならない (リード記事のみ)⁽⁴⁰⁾。

『愛媛新聞』の記述が上記 2 社への爆撃とは確定出来ないが状況的には充分考えられる。

さらに『愛媛新聞 (7/27)』に、「見出し (3 段) 主 : 怠るな完全待避 袖 : 至近弾でも一名の負傷者なし 横 : どんと來い爆弾攻撃」とあり、以下の記事がある。

敵機は去る二十四日午前七時ころから一機または〇〇をもって逐次新居濱〇〇に侵入、同、七時四十五分および八時廿分の二回某工場に爆弾を投下したが笑止にも落弾現場は休業中の作業現場で被害は極めて軽微だった⁽⁴¹⁾。

「509th CG 表」には、Sumitomo Copper Refinery, Niihama (住友銅精錬所, 新居浜 : 愛媛縣新居濱市) に 1 spec, Sumitomo Aluminum Co., Niihama (住友アルミニウム会社, 新居浜 : 愛媛縣新居濱市) に 2 spec とあり、合計 3 発投下したように書かれている。

ところで『USSBS 報告書』では、Chemical Works of Sumitomo Chemical Company, Ltd., Niihama, Japan (住友化学新居浜製作所に当たる) と Light Metal Works of Sumitomo Chemical Company, Ltd., Niihama, Japan (住友化学軽金属製造所にあたる) 両社に、それぞれ単機の B29 が共に午前 7 時 45 分、3 個の接触信管 (AN-MK219) を装着した 10,000 ポンド高性能爆弾を投下したとある⁽⁴²⁾。

『住友化学工業株式会社史』に、「七月二十四日、両製作所にそれぞれ一トン爆弾が投下された。新居浜製造所では氷晶石工場の半ばが壊滅し、死傷者八名を出した。軽金属製造所では第三精錬工場に投下されたが、内部の機器は朝鮮住友軽金属へ転用のため撤去したのちであったので、損害は少なかったものの、その建家とアルミナ事務所・倉庫が破壊され、重軽傷者二八名を出した⁽⁴³⁾」と、その時の様子を伝えている。

『写真が語る原爆投下』でも米軍資料として、上空から撮影した住友精銅と住友軽金属への爆裂写真が掲載されているが時間は両社とも午前 7 時 45 分となっている⁽⁴⁴⁾。

『原爆投下の経緯』でも投下時間を午前 7 時 45 分から 8 時 21 分としている⁽⁴⁵⁾。

また『日本都市戦災地図』新居濱市では、住友重機・住友軽金属が 7 月 24 日に爆弾が投下されたとしているが、その時間は午前 10 時である。時間は誤伝であろうか⁽⁴⁶⁾。

『愛媛新聞』が記述するように両社が、午前 7 時 45 分に、それぞれ爆撃された可能性が高い。

Sumitomo Copper Refinery, Niihama とあるのは住友化学新居浜製作所、氷晶工場であり、Sumitomo Aluminum Co. Niihama とあるのは住友化学軽金属製造所第三精錬工場菊本製造所である⁽⁴⁷⁾。共に新居濱市新居濱町⁽⁴⁸⁾

に所在した。

以上見たように7月24日の新居濱市への模擬原爆の投下は、午前7時45分に2発と思われる。

倉敷絹織(株)西條工場も爆撃された？

もう一発については『愛媛新聞』の言う八時廿分投下が目目される。『日本都市戦災地図』西條町（昭和16年から「市」：菊池注）によると倉敷絹織(株)西條工場が24日午前8時20分頃爆撃され、被害を出している⁽⁴⁹⁾。新居濱市と西條市は10キロメートル程の距離である。「509th CG表」にはKurashikiの名はないが、『写真が語る原爆投下』も爆撃写真を掲載しており⁽⁵⁰⁾、『愛媛新聞』の言う「八時廿分投下」記事が、「倉敷絹織(株)西條工場への午前8時20分頃爆撃」を指している可能性は十分あるように思える。また、リード記事中、24日に銃爆撃を加えた都市名に「西條」の名が見えるのも注目される。「24日、倉敷絹織(株)西條工場への模擬原爆の投下」は極めて可能性が高い。同社は現在の西条市朔日市892クレラ西条工場である⁽⁵¹⁾。倉敷絹織(株)は国策に則り昭和18年12月、社名を「倉敷航空化工(株)」に変更している⁽⁵²⁾。

なお、やはり米軍の記録がなく、日本の新聞でも伺えないが、24日に明らかに模擬原爆と思われる爆弾が徳島市に落とされた記録がある（後述8月8日「徳島条」参照）。

Target name : I.G.R Shops

(I.G.R=Imperial Government Railway Shops。国有鉄道販売所：兵庫縣神戸市⁽⁵³⁾)

『模擬原爆と春日井市』は「神戸に四発」とし、内一発は辻川敦氏が指摘されるように、当該地は国鉄鷹取工場であり、戦時中から運輸通信省大阪鉄道局鷹取工機部となり、現在もJR西日本鷹取工場の大規模車輛工場として稼働している、と記述している⁽⁵⁴⁾。

『神戸新聞（7/25）』はこの神戸市の爆撃に付き、「見出し（3段）主：耐へ抜け廿四時間爆撃 袖：防空即日常生活に徹せ」と題し以下のように記している。

二十四日早朝六時前すでに……その後南方から兵庫地区に侵入した単機行動の敵B29数機は平生の偵察以外神戸須磨地区、兵庫地区、あるひは東部地区に空襲初期の敵の手であった嫌がらせ偽瞞投弾を行ふなど異変を思はせた⁽⁵⁵⁾。

ここでは「偽瞞投弾」と称している。

『写真が語る原爆投下』でも須磨区若木町、山陽電鉄東須磨駅の北に落ちたとして、被災写真を掲載している⁽⁵⁶⁾。

Target name : Kawasaki Locomotive Car Co. (川崎機関車車輛会社：兵庫縣神戸市)

『未来へつづく100年の軌跡』に、「終戦直前の7月24日の爆撃では、1t爆弾による爆撃を受け、建物をはじめ製造中の蒸気機関車3両が吹き飛ばされ、鉄屑が足の踏み場もなくなるほど一面に散乱した。被爆による被災者は、重傷を負って死亡した者3名、軽傷者30名余りであった⁽⁵⁷⁾」とある。

『写真が語る原爆投下』でも川崎車輛への爆撃写真を掲載しており、時間は午前8時15分とする⁽⁵⁸⁾。

Target name : Mitsubishi Heavy Industry (三菱重工業：兵庫縣神戸市)

『写真が語る原爆投下』でも三菱重工への爆撃写真を掲載している⁽⁵⁹⁾。

Target name : Kobe Steel Works (神戸製鋼所：兵庫縣神戸市)

「509th CG表」も神戸市に4発投下したことを明記している。しかし前記したように当時の報道機関も投下弾数をはっきり把握していない。Kobe Steel Worksへの投弾については『模擬原爆と春日井市』も『神戸製鋼八十年』を引いて、投弾地は不明としている⁽⁶⁰⁾。

『神戸製鋼八十年』には、「さらに6月5日、7月24日、8月6日と続いた神戸地区の大空襲によって、甚大な被害を被った」と、壊滅的な被害状況が記述されているが、特に模擬原爆を

想起させる記事はない⁽⁶¹⁾。

他に24日の神戸全般の空襲記事としては、『神戸戦災復興誌』に、空襲を受けたとの記事はあるがそれ以上の記載はない⁽⁶²⁾。

『炎の記録神戸大空襲』「兵庫県下の空襲被害状況 神戸市空襲被害状況」表に7月の空襲日の欄に「24日」があり、爆種欄に「大型爆弾」との記載が有り、当該記事の可能性はある⁽⁶³⁾。

『神戸大空襲 戦後60年から明日へ』に、7月24日0830に神戸、明石、伊丹と附近がB-29五機・P51二十機に襲撃され、若干の爆弾と機銃射撃を受け、死亡10・負傷42・家屋全壊4・同一部破壊3、家を失った人55を出した旨記載している⁽⁶⁴⁾。

Target name : Heavy Industry Yokkaichi

(四日市重工業：三重縣四日市市)

『日本都市戦災地図』四日市市に、七月二四日爆弾攻撃被害：一、投下弾爆弾二五疋一個。二、死傷者行方不明者 死者二名重傷一名軽傷二名 罹災者五二名住家全壊八戸半壊八戸非住家全壊一戸、とある⁽⁶⁵⁾。

『模擬原爆と春日井』「不明の四日市工業地帯」では、着弾地点を第二海軍燃料廠住宅、四日市市千歳町とし、「四日市は海軍燃料廠のあったところで、重要な目標となった。……しかし未だに大型爆弾の証言をしてくれる人がみつからない」としている⁽⁶⁶⁾。

また、『四日市にも戦争があった—四日市空襲の記録』には、「〔第五回空襲〕同年七月二十四日午前七時四十二分、小型機P51が来襲、第二海軍燃料廠の住宅（日永と山手）付近に爆弾を投下。死者二名、負傷者四名」との記述がある⁽⁶⁷⁾。

この日の模擬原爆の投下時間については午前7時40分との記録もあり⁽⁶⁸⁾、時間の近接や爆弾投下地が合致していることから、P51の来襲による損害ということよりB29の爆撃により損害を被った、と見るほうが自然である。

Target name : Toyo Rayon Plant, Sakai

(東洋レーヨン製造工場、堺：滋賀縣大津市)

『東洋レーヨン社史』に、「昭和二十年七月二十四日朝七時半少し前……第一工場（現第三）の則線のプットホームに爆弾を浴びた模様で、周囲の建物は全部破壊され、……爆死者14名の収容と検屍、50人に及ぶ重傷者と200余人の軽傷者」との記載がある⁽⁶⁹⁾。

『日本都市戦災地図』大津市に、「北大路に二十四日午前七時四十分 東洋レーヨン滋賀工場五百キロ爆弾一個落下」とある⁽⁷⁰⁾。

Target name : Ogaki (岐阜縣大垣市)

『岐阜合同新聞（7/25）』に、「見出し（2段）主：大垣に大型爆弾 袖：警戒せよ敵機傍観態度」とあり、以下のように報じている。

大垣市〇〇廿四日朝敵機が投下した一トン級と思はれる大型爆弾一個が落下し〇ため一部に損害〇蒙った、〇の朝東海地区にも艦載機〇襲のラジオの情報が入り間もなく空襲警報のサイレンが鳴ったので市民は一應防空壕に待避の姿勢をとったが大型爆弾を投下した瞬間、多数市民中目撃したのも〇所から市民の一部に大型一機とみて軽視した観があり、同地方は十三日夜の焼爆の際にも爆撃を免れ〇はなかった家もあるので安堵感が手傳って待避を怠った憾みがないともいへない⁽⁷¹⁾。

また『中部日本新聞（7/27）』が、「見出し（2段）主：“この戦訓活かせ” 袖：大垣署が七万市民に檄」とし、以下の注意を喚起している。

大垣署は二日に亘る敵機爆撃の経験を今後活かすため七万市民に呼びかけ注意を喚起する

①（略）②廿四日の爆弾投下は“一機だからまさか”といふ安易感が相当手傳ってゐたので今後は警戒警報即空襲警報の氣持で待避させまた一切の準備をさせる。③多くの壕を作れ。④防空服装の強化。⑤手拭・風呂敷の常時携帯⁽⁷²⁾。

この時の爆撃状況を『岐阜空襲誌-岐阜・各務原・大垣 熱き日の記録-』は、「第四回 ……一〇時頃空襲警報のサイレンが鳴り響いた直後、大垣市の南方より侵入した B29一機が大型爆弾一発（一トン）を投下した。爆弾は高砂町地内水門川べりに落下した。落下地点近くにあった県農業会安八支部と近くの民家などが全半壊し、大きな被害を与えた。特に県農業会安八支部の方々が多数爆死した。被害状況 即死二〇名。重傷約一〇〇名。全壊家屋二〇戸。半壊家屋一〇〇戸。資料 新修大垣市史⁽⁷³⁾」と報じている。

なお、『朝日新聞東京本社（7/28）』が、この爆弾を、「一トン爆弾ではないかと見られ」と記述している⁽⁷⁴⁾。

『日本都市戦災地図』大垣市が、被害区域を図示している⁽⁷⁵⁾。

<注>

- (1) 第509混成群団については、拙著「日本に投下された49個の模擬原爆」『(東洋大学) アジア文化研究所年報』2007年 第42号(2008年2月28日) 18(145)-30(133)頁及び【表1】参照
- (2) 『USSBS 報告書』P.8, P.13&P.180
- (3) 前掲(1)「菊池」22(141)頁。
- (4) 「509th CG 表」。以下同じ。
- (5) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十一日(土)一面二版
なお、『北國毎日新聞』昭和二十年七月二十一日(土)一面が、見出し(1段)で「新潟頻々侵入」とし、朝日と同文を掲載している。
- (6) 『毎日新聞 [東京]』昭和二十年七月二十一日(土)一面二版
- (7) 「著者 金原左門他『茨城県の百年』1992年。山川出版社」「監修 茨城県史編集委員会『茨城県史』近現代編。昭和59年。茨城県」「編集 北茨城市編さん委員会『北茨城市史』下巻。昭和62年。北茨城市」
- (8) 編集発行 春日井の戦争を記録する会『模擬原爆と春日井』1995年。39-40頁。
- (9) 前掲『模擬原爆と春日井』40頁。前掲『茨城県史』669頁。
- (10) 訳者 奥住喜重・工藤洋三『米軍資料 原爆投下の経緯 ウェンドーヴァーから広島・長崎まで』東方出版。1996年。80頁。
- (11) 「田中孟『原爆投下作戦 Tactical Mission Report』『Field Orders 及びその註解』180-81頁」「訳者 奥住喜重・工藤洋三・桂哲男『米軍資料 原爆投下報告書 パンプキンと広島・長崎』東方出版。1993年。199頁」「渡辺洋二編 B-29出撃全リスト(対日戦)『世界の傑作機ボーイング B-29』文林堂。平成7年。56-59頁」
- (12) 『毎日新聞 [東京]』昭和二十年七月二十一日(土)二面二版
- (13) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十一日(土)二面二版
- (14) 『讀賣報知』昭和二十年七月二十一日(土)二面二版
- (15) 前記注(2)参照
- (16) 『東京新聞』昭和二十年七月二十一日(土)一面
- (17) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十二日(土)二面二版
- (18) 4.5トンの模擬原爆を当時の日本の新聞は「1トン爆弾」と記載することが多い。昭和19年の時点で日本海軍が所用する最も重い爆弾は、 $807.5 \pm 7.0\text{kg}$ (8番通1型 改2~改4)といわれる。計画では1,500kg (中攻~大艇用。炸薬450kg), 2,000kg (航空機用), 3式1,000kg (最も硬い目標)等が立案されたようだが実用化には至っていない(陸軍には800kgを超える爆弾は存在しない)。日本は四発機では深山、連山等が試作、一部に輸送機として運用はされている。ところで連山の爆弾搭載能力は4トン(250キロ×8または800キロ×3または1,500キロ×2または60キロ×18または2,000キロ×2)と公称されているが、当時の日本の工業水準では連山・深山級を爆撃機として実戦配備すること

は不可能であった。搭載爆弾としての1,500キロ・2,000キロ級の自主製造も困難であった。

当時実戦配備されていた日本の爆撃機の標準的な爆弾搭載能力は、一式陸攻が800kg、九六式陸攻が800kg、九七式重爆が1,000kg、四式重爆が800kg、呑龍が1,000kg程度であり、少なくとも戦艦の主砲以外では、一般的に「1トン」が爆弾の上限感であろう。

当時の日本の報道機関が4.5トンの模擬原爆を「1トン爆弾」と称したのは、それ以上の重量爆弾は想像できなかつた為と思われる。(「兵頭二十八『日本海軍の爆弾』四谷ラウンド。1999年。81-88頁」「丸編集部編『日本兵器総集 太平洋戦争版 陸海空』光人社。2002年。268-69頁」「エンツォ・アンジェルッチ著／佐貫亦男訳『図説 飛行機大事典 レオナルド・ダ・ビンチから現代まで』講談社。1975年。240-41頁)。

- (19) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十二日(日)二面2版
- (20) 編集 東京大空襲・戦災史 編集委員会『東京大空襲・戦災誌』1973年。東京空襲を記録する会。336頁。
- (21) 「貝塚爽平／監修『明治前期・昭和前期 東京都市地図Ⅰ』東京東部・日本橋。柏書房。1995年。204頁」「編集 地図資料編纂会『昭和前期・日本都市地図集成』柏書房。1986年。5頁」。
- なお、日本橋区・京橋区は現・中央区。麴町区は現・千代田区(『角川日本地名大辞典』東京都。昭和53年)。
- (22) 『福島民友』1994年(平成6年)8月5日(金)23面8版
- (23) 前掲『模擬原爆と春日井』37頁
- (24) 『福島民報』昭和二十年七月二十一日(土)二面
- (25) 「編集 福島市史編纂委員会『福島市史資料叢書』第42輯 新聞資料集成—昭和の福島Ⅳ—昭和六十年。76頁」「前掲『模擬原爆と春日井』35頁」
- (26) 前掲『模擬原爆と春日井』35頁。他には

- 「8時30分(編集 福島市史編集委員会『福島市史』第5巻 近代Ⅱ。昭和50年。452頁)」
- 「8時40分(編集 福島民友新聞社『ふくしま 戦争と人間』7 痛恨編。昭和五十七年。301頁)」
- 「8時40分(編集 福島市史編集委員会『福島市史資料叢書』42輯。76頁)」等がある。何れにせよ8時35分前後と推定される。
- (27) 前掲『ふくしま 戦争と人間』7 痛恨編。301頁。
- (28) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十一日(土)一面2版
- (29) 『新潟日報』1997年(平成9年)8月4日(月)1面12版・23面同、5日(火)22面、6日(水)26面
- (30) 「参照：住友化学新居濱製作所(7/24投弾)社員の実見印象。前掲『模擬原爆と春日井』67-71頁」「柏崎(7/26投弾)市民の実見印象。『新潟日報』1997年(平成9年)8月4日(月)23面12版」
- (31) 『北國毎日新聞』昭和二十年七月二十一日(土)一面
- (32) 編著者 中山伊佐男『ルメイ・最後の空襲—米軍資料に見る富山大空襲—』桂書房。1997年。162頁以降。
- (33) 第一復員省編『日本都市戦災地図』65。原書房。1983年。128-29頁。
- (34) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十一日(土)一面2版
- (35) 『朝日新聞大阪本社』昭和二十年七月二十一日(土)一面2版
- (36) 『京都新聞』昭和二十年七月二十一日(土)一面
- (37) 『北日本新聞』昭和二十年七月二十一日(土)一面
- (38) 『朝日新聞大阪本社』昭和二十年七月二十一日(土)一面2版
- (39) 工藤洋三・奥住喜重『写真が語る 原爆投下 ヒロシマ・ナガサキをもたらした側の全記録』2007年。96-97頁
- (40) 『愛媛新聞』昭和二十年七月二十五日(水)一面

- (41) 『愛媛新聞』昭和二十年七月二十七日（金）二面
- (42) 前掲『USSBS 報告書』P.180&P.206
- (43) 編集発行『住友化学工業株式会社史』昭和五十六年。130頁。
- (44) 前掲『写真が語る原爆投下』。98-99頁及び100-01頁。
- (45) 前掲『米軍資料 原爆投下の経緯 ウェンドヴァーから広島・長崎まで』86頁。
- (46) 前掲『日本都市戦災地図』120。238頁。
- (47) 前掲『模擬原爆と春日井』67-71頁。
- (48) 前掲『日本都市戦災地図』120。238頁。
- (49) 前掲『日本都市戦災地図』121。240頁。
- (50) 前掲『写真が語る原爆投下』102-03頁。
- (51) 前掲『写真が語る原爆投下』206頁。
- (52) 『創新 クラレ80年の軌跡 1926-2006』(株)クラレ。2006年。15頁。
- (53) 辻川敦「原爆模擬原爆を追って—神戸市須磨区・鷹取工機部への投下作戦—」『地域史研究』22-2。平成4年。20-40頁
- (54) 前掲『模擬原爆と春日井』61-65頁。
- (55) 『神戸新聞』昭和二十年七月二十五日（水）二面
- (56) 前掲『写真が語る原爆投下』108-09頁。
- (57) 編集 兵庫工場100周年記念事業委員会事務局『未来へつづく100年の軌跡』川崎重工業株式会社 車両カンパニー。平成19年。42頁。
- (58) 前掲『写真が語る原爆投下』104-05頁。
- (59) 前掲『写真が語る原爆投下』106-07頁。
- (60) 前掲『模擬原爆と春日井』61-65頁。
- (61) 編集 80年編纂委員会『神戸製鋼80年』株式会社神戸製鋼所。昭和61年。68-70頁。
- (62) 監修 建設省計画局区画整理課『神戸戦災復興誌』神戸市建設局計画部。昭和36年。19頁。
- (63) 神戸空襲を記録する会編『炎の記録神戸大空襲』神戸空襲を記録する会。1981年。48頁
- (64) 編修 神戸空襲を記録する会『神戸大空襲 戦後60年から明日へ』のじぎく文庫。2005年。223-24頁。
- (65) 前掲『日本都市戦災地図』76。150頁。
- (66) 前掲『模擬原爆と春日井』60-61頁。
- (67) 編集・発行 四日市革新懇話会『四日市にも戦争があった—四日市空襲の記録』1991年15頁。
- (68) 『中日新聞』「509混成群団の作戦行動」1993年（平成5年）8月5日（木）3面12版
- (69) 編集 社史編集委員会『東洋レーヨン社史』東洋レーヨン株式会社。昭和29年。369頁
- (70) 前掲『日本都市戦災地図』68。135頁
- (71) 『岐阜合同新聞』昭和二十年七月二十五日（水）二面
- (72) 『中部日本新聞』昭和二十年七月二十七日（木）二面
- (73) 編集 岐阜空襲誌編集委員会「大垣空襲の概要」『岐阜空襲誌—岐阜・各務原・大垣 熱き日の記録—』岐阜空襲を記録する会。1978年。135-37頁。
- (74) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十八日（土）二面2版
- (75) 前掲『日本都市戦災地図』56。110頁。